

平成23年度水環境文化賞を受賞して

紫川を愛する会 橋 本 昭 雄

【はじめに】 私が紫川の鮎を始めた契機がある。1980年の夏の話である。私は、北九州市環境科学研究所で化学工場から排出されるウレタン樹脂の原料である dinitrotoluene (DNT) の洞海湾中での挙動を研究していた。成果を International Journal 誌に投稿のため、日本の regional editorial board に郵送した。半年たっても何の音沙汰もないで問い合わせたところ、担当の referee が、私の原稿を紛失したと言うのである。その学会の会長から「学会の権威に関わることであるから是非内密にしていただきたい。必ず、原稿を復元するのでコピーを送って欲しい」という葉書をいただいた。しかし、論文復元中の1981年4月、私は北九州市役所の行政部門に異動になり、DNT の研究が全くできなくなってしまった。復元された私の論文は、投稿から2年掛かって掲載されたが、この国際専門誌への最後の掲載論文となった。

異動した市役所の10階の窓から東側を流れる紫川が見えた。当時公害行政は、まさに ppm 行政で、かつて BOD 30 ppm を越えていた紫川の河口部の水質が 3 ppm に浄化したと新聞記事が踊っていた。1982年の市政提案で、紫川がアユの生息できる BOD 3 ppm になったことを、アユを実際に放流して浄化を確かめることを提案した。この提案は、当時の谷伍平市長の目に留まり、宮崎県五ヶ瀬川産の稚アユ 5 千尾が 1983 年 5 月 2 日に紫川に放流された。冗談半分で提案したアユの放流が実際に実施されたので、この年は、アユの観察に追われる一年になった。放流も下流で行って欲しかったが、市長サイドは、下流の河川水質にはあまり自信がなかったと見えて、河川長が 20 km の紫川の河口から 10 km 上流の田園地域の中流部が放流場所となった。アユを観察する方法がまず問題となった。放流時平均 10 cm のアユは、7 月頃にはほぼ 20 cm 程度に成長するするだろうと予想を立て、投網で捕獲する作戦を立て、放流から 2 ヶ月間、投網の練習をほぼ毎日繰り返し、7 月 19 日に体長 20 cm のアユを実際に捕獲するまでに腕が上達した。環境科学研究所で化学物質のモニタリングの研究をしていた時には、全くマスコミや市民に注目されなかつたが、アユのモニタリングの成果は直ぐに新聞報道されて市民の注目を集めた。一番驚いたのは、全国規模で展開中の釣具商の故高宮義諦会長や自動車部品販売業の故湯佐一郎会長から協力の申し出があつて、専門でないアユの観察・調査を一所懸命やらなければならない羽目になった。そんな折、「アユ学」の助人が現れた。

【出会い】 1987 年 10 月のある日、日高秀夫氏が私の 4 度目の職場・水道局研究所に、拙著「紫川のアユ」が掲載された北九州市都市協会発行の「ひろば北九州」を携えて尋ねてきた^{1,2)}。

日高氏は、愛媛大学で合成洗剤の主成分である Linear Alky1 Benzene Sulphonate (LAS) がアユに及ぼす忌避反応を研究してきた。アユは極微量 (ppb レベル) の LAS を感知して忌避し川を上らなくなること等の研究によって農学博士の学位を得ていた³⁾。紫川を愛する会のロゴマークを釣りキチ三平の著者・矢口高雄氏に書いても貰ったのも

日高博士である（図 1）。日高氏との親交ぶりや鮎の化学物質に対する忌避反応に関する研究を漫画家・矢口氏が漫画雑誌「週間ヤングジャンプ 7/30 増刊号 (1990)」で紹介している。



図 1 紫川を愛する会のロゴマーク

アユは、秋に川で生まれ冬を海で過ごす。春には川を上り、夏の間、そこで成熟し、秋に産卵して一生を終える。アユは、川と海を行き来するので、アユを観察すれば、川と海、両方の水質環境の状態を知ることができる。アユは、水環境科学を研究する我々にとって大変便利な魚類指標である。日高氏は、「カムバック・アユ計画」を論文にして公表してあった⁴⁾。私は、「紫川にアユ戻る－紫川汚濁史研究－」を出版のため印刷中であった⁵⁾。

【紫川を愛する会の発足】 1988 年 11 月 3 日の文化の日に、北九州市戸畠図書館の文化講演会で、「森鷗外と紫川」を講演した。話を締めくくるに当たり、紫川を総合的に研究する市民組織を作りたいと口を滑らせてしまった。これが翌日の西日本新聞に大きく報道され、日高氏、武末純一氏（福岡大学教授）、上田良子氏（第一期ミズ 21 メンバー）等から協力の申し出があつて、市民グループを結成せざるを得ない状況に追い込まれ、私は、世話入会の代表を勤める羽目になった。武末氏は考古学の立場から、日高氏は鮎の研究を、私は、紫川の水質とアユの相関関係および以前から興味を持っていた紫川の名前の由来など、川と人との関わり等を、上田さんは、会員募集等大まかな分担ができた。このようにして、紫川を愛する会は 1989 年 3 月 25 日に会員 16 名で正式に発足した。

【結び】 会の最初の活動は、河川清掃（ごみひろい）であった。後年、スマラン市（インドネシア）のパジャック川、セブ島（フィリピン）のブツアノン川等で河川清掃を実施するとは夢にも思わなかった。JICA の国際研修の実績は、2012 年現在 61 カ国 500 名にも上っている。2013 年 7 月、マレーシア国ボルネオ島、クチン市において「公害を克服した北九州市の経験に学ぶ」のテーマで国際シンポジウムを計画している。この度、貴学会の名誉ある水環境文化賞を授与される榮誉に与り、紫川を愛する会を結成する契機を与え、活動を支えてくださった総ての人々に心から感謝をいたします。とくに、1999 年 4 月 19 日紫川調査中に殉職された日高秀夫博士のご貢献を称えます。

参考文献

- 1) 橋本昭雄 (1984) ひろば北九州, 7 (3), 42-46.
- 2) 橋本昭雄 (1984) ひろば北九州, 7 (4), 48-52.
- 3) 立川涼、日高秀夫 (1978) 農化, 52, 263-270.
- 4) 日高秀夫 (1987) 水, 29, 18-25.
- 5) 橋本昭雄 (1988) 紫川にアユ戻る－紫川汚濁史研究－, 165pp., 紫川にアユを呼び戻す会, 北九州。